

『リチャード二世』論

—— その政治的倫理意識の欠除 ——

山 田 梁

『リチャード二世』は王の叔父グロースター殺害の罪を糾弾するボリングブルックと受けて立つモーブレーのはげしい応酬、そして二人を何とか和解させようとするリチャードの、皮肉と怪侮と王の威光を交えたせりふで開幕する。しかし、事件の究極の責は王その人にあることは、ボリングブルック、モーブレーの二人にとっても既定の事実である。そのことが冒頭のシーンを何か空々しいものにする。露きだしにされる激情、はげしいことばの応酬の割に、遂に空しい後味が残るのである。こうしたアイロニカルな局面のかもしだす調べが、『リチャード二世』を一貫するトーンである。

リチャードがグロースター殺害の究極の責任者であることは、モーブレーの微妙な発言 (I. i. 132-133) によって暗示されるが、次の場では、復讐を求める未亡人に対してゴントが、王への復讐は天に委ねるほかないというところから一層明白となる。ちなみに、『リチャード二世』より少し前に書かれた *Thomas of Woodstock* では、グロースター公トマス逮捕は王自らの手でなされ、またカレーでの殺害も彼の命でなされている。シェイクスピアは当時における既定の事実を前提として、巧妙にアイロニカルな冒頭のシーンを設定したのである。

問題はボリングブルックが何故リチャードを責めず、ただ王の命を実行した(と彼が考えた)モーブレーを責めるかということである。この場合、王を直接糾弾することは臣下としてできないことであった、というのは実は半分の答えにしかならない。それはこの史劇に対する正しい解答ではない。ドラマとして見た場合、臣下であるにもかかわらず、明らかに王が責任者であるこの事件をわざわざ取りあげた点に強調が置かれなければならない。

廻りくどい表現を避ければ、つまりこの責任追求は、王に対する明らかな挑戦であった。しかも、ボリングブルックはモーブレーの弱みに巧妙につけ込ん

1. 1592年から1995年の間に書かれた anonymous play で、大体リチャードの治政前半を扱っているために、E. K. Chambers は *I Richard II* と呼び、F. S. Boas は主要な登場人物の名をとって *Thomas of Woodstock* と呼ぶ。

だのである。王が彼に殺害を命じたことは事実であり、またグロースターが死んだことも事実である。ボリングブルックは当然正義の立場に立つわけである。絶対的な王の権力の下であろうとも、また肉親の殺害が政治の世界ではまき起りうることでであろうとも、叔父の殺害がよからうはずはない。ましてグロースターは、ゴーントの表現を借りれば “plain well-meaning soul” (II. i. 128) である。つまり王にはけむたい存在ではあろうが、よかれと思って直諫も辞さない立派な人物である。彼の人物を暗示する類似の表現は、『ウッドストック』にもあるが、実は史実的根拠はないらしい。シェイクスピアはグロースターを忠臣にしたてることによって、王の行為の不正なることを印象づけようとしたわけである。その意図は、結局ボリングブルックの糾弾を一そう正義のためと印象づけることにある。彼の父ゴーントもこの史劇では愛国の至情を吐露するが、実在の彼は野心家であつたらしい。ここにもシェイクスピアの作為が感じられる。

正義のために、グロースター事件を取りあげたボリングブルックではあるが、それがまことに「正義のため」であるかどうかはまた別問題である。もしかすると、「正義の名の下に」であるかも知れないからである。まことに「正義」のためであるならば、こののちリチャードに対してその非を責める機会があったはずだ。そしてまた、より重要なことは、たとえそれが正義のためであったにせよ、彼自らこの史劇の最後に於て、皮肉にもリチャードを殺害する。それもまた政治の世界では止むを得ないことであったかも知れない。そのことを「正義」と「政治」の矛盾という名で呼んでもいいが、問題はこの矛盾をボリングブルックがいかに自分の魂に受けとめていたかということである。彼は冒頭のシーンで、グロースターの血がアベルの血のように復讐を求めているという——

Which blood, like sacrificing Abel's, cries,
Even from the tongueless caverns of the earth,
To me for justice and rough chastisement;

(I. i. 104—)

2. I. i. で、ヨークのせりふに二ヶ所 ‘Plain Thomas’ とある。これは一義的にはリチャードの華美な宮廷にあってグロースター公トマスが服装に構わないことをいったもの。しかしトマスはヨークに対して次のようにいう—— “My heart in this plain frieze sits true and right. / In this I'll serve my king as true and bold / As if my outside were all trapped in gold.” (211-3) 『リチャード二世』のゴーントの “plain well-meaning soul” はおそらくここから来ていると思われる。『ウッドストック』よりの引用は *Six Early Plays: Related to the Shakespeare Canon*, ed. by Everitt and Armstrong (Copenhagen, 1965) による。

3. Cf. *Richard II* ed. by Peter Ure (The New Arden Ed.), pp. xxxiv-xxxv,

ところが、一旦王となると、自分の意を休してリチャードを殺したエックストンに対しては、まことに身勝手にもカインとともにさまよえという――

With Cain go wander through shade of night,
And never show thy head by day nor light.

(V. vi. 43—)

グロースターの血をアベルの血になぞらえたからには、いまカインとともに夜の闇をさまよわなければならないのは、ほかならぬ彼でなければならない。エックストンを追放するのは、その精神に於て、リチャードの罪を承知しながらもただ直接の下手人としてのモーブレーを責めるのと同じである。結果的には、自分が後に犯す罪を予想して王であるリチャードには寛大であったということにもなる。ともかく冒頭と大詰の対照的な二つのせりふは、アイロニカルである。しかしそこにシェイクスピアのアイロニカルな目も見るといってすましてしまうには、ことはあまりに重大である。問題はもっと重いはずだ。ボリングブルックの魂にずしりと重々しくこたえているはずだ。エックストンへの追放命令につづけて、彼は罪亡ぼしの聖地巡礼を言明する。たしかにそこにはかつての彼には見られない憂愁のかげはある。しかしそうした罪の意識は、エックストンにも、いや史劇に登場する職業的刺客にも多かれ少なかれ見られることであって、ボリングブルックだけを始めから特別扱いにするわけにはいかない。

二幕三場での再登場以降に於ける彼の著しい特長は、王位への思惑とそれが彼の意識に与えずにはおかぬ反応に関して、奇妙にも何も語らないことである。それは意識の世界の欠陥とも空洞とも呼びたい程に不気味である。より明確には倫理的意識の世界が全く描かれていないことである。最終の場に於ける罪の意識を考える場合に、このことを考慮に入れることは当然であるが、同時に、この現象を単に帰国後に於ける変貌として片づけることなく追放前(一幕)のボリングブルックにも当てはめるべきであろう。

1

ボリングブルックがグロースター事件を取りあげてその罪を糾弾したのは、明らかに王への挑戦であったと先に書いた。そしてまた、正義のためとはいいいながら、案外「正義の名のもとに」といえるかも知れないと述べた。実はこの二つは同じことである。ボリングブルックは「正義の名の下に」リチャードに挑戦したのである。ずいぶんと始めから悪意ある見方をしているようにも見えるが、このドラマの構成がそのことを暗示している。

4. Cf. 『リチャード三世』で二人の王子を殺したティレルの独白 (IV. iii. 1-22) .

ボリングブルックは実権を掌握した後、再びグロースター問題を持ち出している。(IV. i.) 誰が王とそのことを相談し、誰が彼を殺したかを、王の寵臣の一人バゴットに証言させようとする。しかし、裁き手の異なるこの二度目の問題提議は、それだけに一層リチャードとの対照を誇示するための行為という印象を与える。それはあくなき正義の追求というよりも、芝居がかった目的意識が強く感じられるのである。同一事件ないし局面の繰り返しというテクニークは、常に何らかの劇的效果を狙った手法であるが、この史劇に関する限り、その狙いは繰り返すことによって、初めの局面に光りを投じてその真相を明白にすることにある。二度目のグロースター事件の責任追求が、外観は正義に見えるながら、実は先王リチャードの裁きとの対比を誇示するためのものであったし、あるいは、新たに嫌疑のかかったオーマル、しかもリチャードの側近であり、将来自分とリチャードとの関係にもなりかねない徒弟オーマルを、リチャードに習って葬り去ろうとしたものであったかも知れない。いずれにしてもこのことは、冒頭の責任追求も、狙いは他にあったのだという印象を強める。単にこの問題に限らず、ボリングブルックに対しては常にこの種の警戒、つまり彼の真意への警戒が必要である。

ボリングブルックの王に対する挑戦にとって、モーブレーは格好の餌食であろう。彼は疑われても止むを得ない立場に立たされていたからである。しかもそうしたモーブレーの弱みは、同時にまたリチャードの弱みでもある。従ってリチャードとてモーブレーへの追求を自分に対する挑戦と受けとらないはずはない。それは彼のせりふの端ばしにあらわれている。

シェイクスピアが『リチャード二世』を書くに当って意識の中にあったと思われる『ウッドストック』では、先に述べたように、王自らグロースターを捕えてカレーに送り、ラプールというカレーの総督に殺させる。その殺害の場も舞台にのぼるが、逮捕に先立って、王はグリーン、バゴット、ビュシー、スクループ、トレジリアンといったいわゆる寵臣たちと逮捕の方法について相談する。それに対して、『リチャード二世』に於ては、これらの寵臣たちの登場が一幕四場、つまりボリングブルックとモーブレーの追放後に置かれていることに作為が感じられるが、それはまだしも冒頭での糾弾に於て彼らの名が全然挙らないのは不思議である。さらに三幕二場のビュシー、グリーン断罪の場でも、数々の罪状を挙げながらグロースター殺害についてはボリングブルックは全く触れない。—しかし先にもいったように、四幕一場ではバゴットを証人と

5. New Arden の編者 Peter Ure はこの点ではきわめて慎重で、断定を避けている。Richard II, pp. xxxvii-xxxix.

6. IV. i. (相談の場) IV. ii. (逮捕の場) V. i. (殺害の場)
なお『ウッドストック』にはモーブレーは登場しない。

しているが、『ウッドストック』との違いが、ホリンシェッドなどの史書との違いと同様、シェイクスピアの意識的な工作であると考えてよいであろう。現に、ゴントは、『ウッドストック』ではグロスター未亡人に対して王への復讐を約束するに対し、『リチャード二世』のゴントは、王の絶対的権威を説いて復讐は天に委ねるほかはないと答える。(I. ii. 37—41)『ウッドストック』で明白にされているビュシー派の罪にはボリングブルックがいま全く触れないのには、作者の作為が強く感じられるのである。

ボリングブルックは、過去18年の謀反はすべてモーブレーが張本人だなどと、国内の不安は彼ひとりの責任であるかのごとくに責めたてる。後で、ビュシー、バゴットらを“The caterpillars of the commonwealth.” (II. iii. 166)と最大限の侮蔑のことばで呼んでいるくらいだから、冒頭でも何らかの糾弾がなされても当然ではなかろうか。彼は一幕一場では口汚くモーブレーを罵りながら、四幕一場ではあらたに嫌疑のかかった従弟オーマールと対決させるため、所領まで回復して帰国させようとする。これは寛大なのか、寛大さを装ったのかは別として、一応、モーブレーへの評価が、バゴットたちへの評価の比ではなかったことを思わせる。寵臣とも佞臣ともいふべき連中に対する態度は軽蔑以外の何ものでもないに反し、モーブレーへの思いはライバル意識であり警戒心であったであろう。

この意味でも彼の王への挑戦がモーブレー弾劾という形を取ったのも当然であろう。ここでモーブレーがリチャードの体制に於て占める意義を考えてみたい。すでにリチャードに大きな影響力を与えつつある勢力として寵臣たちが考えられるが、また一方、彼らへの批判勢力としてゴントやヨークがいることは、二幕一場で明らかである。後者の勢力が古い時代の英国、つまりリチャードの祖父エドワード三世や父黒太子時代の英国を代表する勢力であることは当然であろう。しかしリチャードはそうした人々からの忠告やいさめに背を向け、もっぱらバゴットらを相談相手に政治を行っている。モーブレーの立場は、その騎士的精神からみて当然古い勢力に属している。しかし反リチャードではなく、むしろリチャードに対しては忠誠であろうとする。その意味で、反リチャードのボリングブルックにとって彼は大きな脅威であったはずである。しかし、王の心はすでにあまりにも騎士的なモーブレーからは離れている。その点もまたボリングブルックにとっては彼の弱みと写る。いよいよもって彼は攻撃するに格好の目標となる。彼さえ倒せば、後は王を取り巻く連中など怖るるに足りない。こうした目算がボリングブルックの心にあったと考えてよいで

7. ランカスター (ゴント) は V. iii. の冒頭で、いきなり ‘wanton tyrant’ への復讐を約して未亡人を慰める。(2718—2722)『リチャード二世』のゴントとの違いは著しい。

あろう。現に彼は帰国後、ヨークの中立を知るや直ちにグリーンらをプリスト一城に攻めて処罰している。いわばモーブレーはリチャード体制の外縁であり、寵臣は内縁であったわけだ。モーブレーを糾弾した結果、自分も追放されるという誤算はあったが、それは全く王の恣意に原因することである。

モーブレーは騎士的世界の名残りをとどめる一人であろう。忠節で硬骨漢で名誉を何よりも重んじる。しかしグロスター殺害事件では苦しい立場に立たされる。次のことばは微妙な彼の立場をしめしている――

For Gloucester's death,
I slew him not; but to my own disgrace
Neglected my sworn duty in that case.

(I. i. 132—)

意外にも、無実の証しを立てるために、王の責任を暴露するのである。これは臣下の言としては奇妙である。さすがにリチャードには動揺はかくせない。モーブレーが語りおえると、“be rul'd by me”と二人の和解を命じるのもそのためであろう。一方ボリングブルックは、得たりとばかり攻撃を王に向けるかというそうではない。彼にとってはそれは先刻承知のことである。いやそれは彼にとってどうでもよいことである。彼の狙いは他にあるのだ。彼はただ王に対して脅威を与え、出来うれば王の力を一つつつ奪い去ることにあったのである。この意味で、彼は一度も、フリント城(III. iii.)に於ても、また廃位のシーン(IV. i.)に於てさえも、リチャードに対し、面と向ってグロスター殺しの罪を責めないのは注目し値いする。

上に引用した言明は当然モーブレー自身の矛盾を暴露するものであろう。忠誠を誓う彼が王への思いやりを犠牲にして自分の証しをすることに、矛盾とそしてまたヒューマンな人間関係の欠除が感じられるからである。このことは、彼が命よりも名誉を重んじる態度とともに、何か騎士的モラルの形式化を印象づける。和解を命じる王に彼は答える――

My life thou shalt command, but not my shame:
The one my duty owes; but my fair name,—
Despite of death that lives upon my grave,—
To dark dishonour's use thou shalt not have.

(166—)

8. 史実の上では、ボリングブルックはフリント城での公見に先立って、ノーサンバランドをして、グロスター殺害の責任追求のため議会の開会をリチャードに要求させている。(Richard II, New Arden ed. pp. 111-2).

一旦挑戦を受けたからには、たとえ王の命であろうとも和解などではない、というのだ。いまさら和解するなどは、彼にとって 'dark dishonour' だというのである。それでは王の命に背いて、グロスター殺害を怠ったのも、殺害を 'dark dishonour' とみたからであろうか。その点に関してはモーブレーは何も語らない。ただ、王命に背いたことを 'to my own disgrace' といっているだけである。この 'disgrace' は不名誉、恥ともまた王の寵を失ったとも取れて曖昧だ。いずれにしても、グロスター殺しに対する態度と比較して、ただ名を惜しみ、名を重んじる精神には何か形式的な血の通わない、ヒューマンなものの欠除が感じられる。やがてフォルスタフが名誉についての 'catechism' の中で、"What is honour? a word" (*IH4*. V. i. 134) といっているのを考え合せるとモーブレーのこの態度には騎士のモラルの形式化が幾分か感じられる。

リチャードに到っては、全くの騎士の世界の形骸が残っているにすぎない。コヴェントリーでの決闘に先立つ仰々しい形式、しかもその一方的中止命令によるアンティ・クライマックスにその感を深くする。決闘の場を待つまでもなく、一幕一場の最後のせりふを見れば、その麗々しいことばの背後に、王のモラルの空しさが感じられよう――

Since we cannot atone you, we shall see
Justice design the victor's chivalry.
Marshal, command our officers-at-arms
Be ready to direct these home alarms.

(202—)

騎士の体制とそのモラルに対するシェイクスピアの態度は、こうしたところから考えてもむしろ批判的であったのではないであろうか。次の史劇『ヘンリ四世、第一部』では、先にもいったようにフォルスタフをして名誉を徹底的に愚弄させているところからも、いよいよその感を深くする。イエーツがリチャードへの共感を以て書いた "The courtly and saintly ideals of the Middle Ages were fading, and the practical ideals of the modern age had begun to threaten the unuseful dome of the sky;..." という文章は、たしかにこの史劇に対する鋭い詩人的洞察ではあるが、同時にそこに「世紀末」詩人の感傷も多分に感じられるのである。

しかしながらボリングブルックと対照すればモーブレーの名誉を尊ぶ心情の真摯さ、またそのせりふの持つ形式の美は否定できない。

Mine honour is my life; both grow in one;
 Take honour from me, and my life is done:
 Then, dear my liege, mine honour let me try;
 In that I live and for that will I die.

(182—)

なるほどこれはレトリカルである。しかし名を惜しむモーブレーの思いが素朴に語られていることは、次のボリングブルックのせりふと比べれば明瞭となるであろう。お前の方から和解しろと王にいわれて彼は答える——

O! God defend my soul from such deep sin.
 Shall I seem crest-fall'n in my father's sight
 Or with pale beggar-fear impeach my height
 Before this out-dar'd dastard? Ere my tongue
 Shall wound my honour with such feeble wrong,
 Or sound so base a parle, my teeth shall tear
 The slavish motive of recanting fear,
 And spit it bleeding in his high disgrace,
 Where shame doth harbour, even in Mowbray's face.

(187—)

モーブレーのせりふの持つ単純ながら格式高い調べはここにはない。激しい怒りをそのまま表現した全く八方破れの罵倒である。形式など度外視した型破りのレトリックともいえよう。彼もまた名誉を口にする。しかしモーブレーの名を惜しむ思いとは違って、我武者羅で身勝手な我意をそれは感じさせる。それはモーブレーには見られない複雑な心理と心情を物語り、いわば騎士的モラルと体制からはみだした精神を暗示するといえよう。モーブレーの心情のうちに否定しがたくだよっている、一種の縋るような思い、白鳥の歌にも似た哀感とは全く別種の、力強い精神と活力がそこに潜んでいることもまた否定できない。しかしながら、注目すべきことはこうした激情にかられたボリングブルックはもう二度と見ることはできない点である。幾分似ている局面としては、追放を命じられた直後父との別れに際して、悲しみを素直に訴えているところであろう。帰国(II. iii.)後のボリングブルックには、こうした感情をむきだしにするようなところは全く見当たらない。感情を抑制することの得策を知るからである。

ボリングブルックに対して不当な先入主をもって考察を進めているように見えるかも知れない。一般にはリチャードとボリングブルックへの反感と共感が、二人の運命の変遷とともに移行するといわれる。同じことは『コドワード

二世』のエドワードとモーティマーにもいわれる。しかし『リチャード二世』に関してはマローの史劇ほどに明快ではない。シェイクスピアの目はマローに比較すると一層アイロニカルである。いわゆる運命の車輪によって一人は下り、一人は上る二人の王への態度はきわめて曖昧であって、これまたイエーツのように、作者の共感がリチャードの側にあったと割りきることはできない。共感の移行をとなえる人々は、一幕に於てはリチャードへの反感とボリングブルックへの同情をいうが、リチャードへの反感は当然としても、ボリングブルックへの共感には同意しかねる。そのことの論証にこれまで努めて来たわけであるが、一場と三場に於けるモーブレーとボリングブルックを比較してみても、シェイクスピアの筆は、むしろ前者のせりふに一層の真実味をただよわせていることは否定できない。成程すでに述べたように、彼の心情に騎士のモラルの形式化は見られる。しかしそこにシェイクスピアのきびしい批判の目を感じることはできない。永久追放を宣せられたモーブレーのせりふは、いささかりチャードへの恨みをも交えて人の心に訴えて来る。

しかも彼の最後のせりふは、ボリングブルックの正体を見破り、王の運命を予言する最初のものとして極めて印象的である。

But what thou art, God, thou, and I do know;
And all too soon, I fear, the king shall rue.
Farewell, my liege. Now no way can I stray;
Save back to England, all the world's my way.

(I. iii. 204—)

短い予言ではあるが、カーライルの予言 (IV. i. 136-149. バラ戦争の予言) や、リチャードの予言 (V. i. 55-68, ボリングブルックとノーサンバランドの離間反目) にも劣らない重みと真実を伝えるものである。さらにモーブレーの重厚さと先見の明を、次のシーンでのグリーンズの軽薄さと比較する時、彼の存在と追放がただならぬ意義を持つものであったことを思わせる。リチャードがボリングブルックの民衆との別れを軽蔑の思いで、しかし一抹の警戒心を以って語った時、グリーンはただ

Well, he is gone; and with him go these thoughts.

(I. iv. 37)

10. I cannot believe that Shakespeare looked on his Richard II with any but sympathetic eyes, understanding indeed how ill-fitted he was to be King, at a certain moment of history, but understanding that he was lovable and full of capricious fancy, 'a wild creature' as Pater has called him. *Ideas of Good and Evil*, (Collected Works, Vol. VI), p. 123.

と答えて話題を転じる。ボリングブルックへの警戒を示しているのが、ニュアンスは違うが、モーブレーとリチャードの二人だけであったのも皮肉である。

リチャードは二人を追放することで一応危機は乗り越える。しかしそれはモーブレーの犠牲に於てなされたものであった。しかも彼を葬り去ることこそ実はボリングブルックの狙いとするところであった。モーブレーの追放の意義は見落され勝ちであるが、史劇の展望という視点から、『ヘンリ四世・第二部』の中のモーブレーの子のことばを引用しておこう――

O! when the king did throw his warder down,
His own life hung upon the staff he threw;
Then threw he down himself and all their lives
That by indictment and by dint of sword
Have since miscarried under Bolingbroke.

(2H4, IV. i. 125—)

追放の宣告を受けたモーブレーの動揺とは対照的に、10年の追放を命じられたボリングブルックはふてぶてしいまでに落ちついている――

Your will be done; this must my comfort be,
That sun that warms you here, shall shine on me,
And those his golden beams to you here lent
Shall point on me and gild my banishment.

(I. iii. 144—)

太陽のイメージはリチャードの “twice five summers have enrich'd our fields” (141) をうけたもので、その縁語として王に対しては ‘warm’, ‘lent’ を用いながら、自分には ‘shine on me’ ‘point on me’ ‘gild’ といっているのは不敵である。この直後での父ゴントへの歎きから考えてもこれは負け惜しみではあるが、王に対することばとしてはまことにふてぶてしい。むしろ何か期するところがあるかのごとき言辞である。さらにゴントの涙をみたりチャードが刑を6年に短縮すると、

How long a time lies in one little word!
Four lagging winters and four wanton springs
End in a word: such is the breath of kings.

(213—)

常識的にみれば、形式的な口先だけの感謝であろうとも、ここは何らかの感謝

がなされて然るべきであろう。それがないどころか、これはまるで挑戦だ。この三行の持つ調は¹¹独白の、いや傍白によく見かける挑戦の響きである。ここで注目すべきことは、僅か三行の中での、‘one little word’, ‘a word’, ‘breath’の繰り返しの持つ重みである。自分にとって重大なことが、王の気紛れによって決定され、しかも僅か五行の王のせりふによっていとも簡単に宣言されたことへの怒りが、この「ことば」への異常な関心となって表現されたのである。さらに減刑が父への同情からとあっては、王のまことの心を知る彼にとって、王のことばの空々しさが一顧身にしみたはずである。いやそれどころか、「ことば」が腹の中とは全く異なる口先だけのものでしかあり得ないことを、人の心を想像することによってではなく、いま、この憤りの瞬間に於て、直接自分の体験として悟るのである。従って口先だけの感謝など彼がいおうともしないのはあまりにも当然であろう。彼はこの「ことば」への関心は、この直後の一コマで一段と明確となる。オーマールたちの別れの挨拶にことばを返そうとしないボリングブルックを父がたしなめる。彼はそれに答えて――

I have too few [words] to take my leave of you,
When the tongue's office should be prodigal
To breathe the abundant dolour of the heart.

(255—)

オーマールなどに心にもないことばは返したくないというのだ。王とその側近に対する敵意をこれは示している。同じく追放されたモーブレーが、彼の場合永久追放とあって母国語を語る日のない悲しみを訴えたせりふの中で、‘tongue’を弦のないハープになぞらえている。形式的でレトリカルで芝居がかった裁きの後であるだけに、これら二つの‘tongue’は奇妙に暗示的である。

また次の父との対話は、ボリングブルックの性格を浮彫りにする。ストイックな賢人の徳を教えて忍従を説き、さらに歌う小鳥を楽人に、花を麗人に、そして追放の一步一步を楽しい踊りのステップと思えとゴントはいう――

For gnarling sorrow hath less power to bite
The man that mocks at it and sets it light.

(292—)

ゴントとしてはこの場合こういう以外はないであろうが、いうまでもなくこれは気安めの慰めのことばにすぎない。せめて父にだけ悲しみを心のたけ訴え

11. 「リチャード二世」の特色の一つは、ボリングブルックに全然独白がないことである。一般に何かを画する人間が独白するのは、当時のドラマの約束である。この点が彼の意図を曖昧なものにする原因となる。また傍白もこの史劇にはない。これらのことについては、本論の中で触れることになる。

たいと思うボリングブルックにとって、忍従や空しい想像に生きることはごまかしにすぎないのだ。はたして彼は答える——

O! who can hold a fire in his hand
By thinking on the frosty Caucasus?
Or cloy the hungry edge of appetite
By bare imagination of a feast?
Or wallow naked in December snow
By thinking on fantastic summer's heat?

(294—)

先に引用した王へのことば(144—147)がまったくの強がりであったことが判明する。ことばの空しさをそれだけに彼は身にしみて感じとったのである。

O no! the apprehension of the good
Gives but the greater feeling to the worse:
Fell sorrow's tooth doth never rankle more
Than when it bites, but lances not the sore.

(300—)

父の気安めにいったことばはかえってボリングブルックの悲しみをあおる結果となる。現実をごまかし、すりかえる「ことば」への警戒が皮肉にも父のことばによって一層強まるのである。しかしながら彼にとっては「ことば」への警戒はそのままだ「ことば」への不信とはならない。「ことば」の効能を彼は十分心得えているからである。「ことば」への警戒は、「ことば」と実体との真の関係を知った上での姿勢であった。このことはやがて“shadow”と“substance”とのパラレルとして展開するはずである。¹²

しかしボリングブルックにこの「ことば」への警戒が始めからあったわけではない。冒頭のシーンと三場の前半では、先にも述べたように、彼にもまた激情とともにことばの浪費がみられるからである。帰国後の彼の変貌は、政治的目的——王位への野望とはまだいえないが——に動機をもつものではあるが、ドラマとして眺めた場合、「ことば」に対する姿勢の変化が興味を呼ぶのである。それは一言でいえば、リアリストの態度である。父へのせりふの中で、忠部にメスの届かないもどかしさで悲しみの激しさを訴えているのは、たんなる感情の世界をこえた現実の世界における彼の姿勢をも暗示するもので、最後の一行“Though banish'd, yet a true-born Englishman.”(309)のもつ男性

12. II. ii. の王妃とグリーンンの対話や IV. i. での、リチャードが鏡を投げつけるエピソードにあらわれる。

的響きとともに興味ぶかい。

一幕四場の始めに、追放に旅立つボリングブルックの民衆との別れを語るリチャードのせりふがある。王の交替劇であるこの史劇に於て、民衆がもつ意義は重要であるが、シェイクスピアはボリングブルックと民衆との接触を、事もあるうにリチャードに語らせている。――

Ourself and Bushy, Bagot here and Green
 Observ'd his courtship to the common people,
 How he did seem to dive into their hearts
 With humble and familiar courtesy,
 What reverence he did throw away on slaves,
 Wooing poor craftsmen with the craft of smiles...
 (I.iv. 23—)

これはリチャードのボリングブルックへの悪意から語られたものではあるが、また真実の一面をも伝えたものであろう。先にグロスター殺害を取りあげたボリングブルックの意図について考察し、そこに正義の名のもとになされた政治的意図を感じとった。このシーンでは、ボリングブルックへの悪意と民衆への軽侮という発言者の感情が介在することによって、かえって当のボリングブルックの姿勢が浮彫りにされている。普通ならばリチャードが“the craft of smiles”という時、それは彼の悪意からの歪曲であって、真実は心からの‘smiles’であったと考えるのが穏当であろう。事実このシーン自体、後半にゴーストの病いに対するリチャードの冷酷なことばなどもあってまともでヒューマンな雰囲気からは遠い。またボリングブルックとの別れに際して、ことばものでないほどの悲しみを装ったとオーマールは

...craft
 To counterfeit oppression of such grief
 That words seem'd buried in my sorrow's grave.
 (13—)

と皮肉なせりふを口にする。こうした雰囲気の中で語られるだけにリチャードのせりふを真実から遠いと理解するのが自然であろう。あるいは少なくともボリングブルックの真意をしばらく曖昧なまま保留しておくのが妥当であろう。しかしやがてドラマの展開とともに、彼の民衆への姿勢が尊重よりも利用する態度であることが明白となってくる。中正で冷静な判断よりも、悪意をもった目にボリングブルックの真の姿を捉えさせているところにシェイクスピアのアイロニーが感じられる。帰国後、その意中に関して奇妙にも曖昧さに包まれて

いるボリングブルックに対して、このリチャード的な態度は一つのアプローチでもあろう。実権を握った後での彼のロンドン入りをヨークは次のように述べている——

...he, from one side to the other turning,
Bare-headed, lower than his proud steed's neck,
Bespake them thus, 'I thank you, countrymen.'

(V. ii. 18—)

ボリングブルックに好意をもった人の描写ですらこうである。彼の民衆に対する態度には何か不自然なものがあることは、このヨークの描写からも否定できない。しかしそうしたこと以上に重要なことは、彼の民衆との接触を示す二つの場面が、いずれも舞台の外の出来事として、彼に対して全く相反する感情を抱く二人の人物にその様子を語らせている点である。それは彼の真意を意識的に曖昧なものにする作者の意図を物語るものである。ボリングブルックその人には彼の民衆観をついに彼自らの口からは語らせない。何ごとであれ真意を語らないことは、『リチャード二世』中の彼の著しい特色である。この特色は、『ヘンリ四世・第一部』に於ては、彼自ら民衆への態度はすべてが計算の上に立った姿勢にすぎなかったと認めている事実と際立つ対照をしめしている。

...I stole all courtesy from heaven,
And dress'd myself in such humility
That I did pluck allegiance from men's hearts,
Loud shouts and salutations from their mouths,
Even in the presence of the crowned king.

(IH4, III. ii. 50—)

2

ボリングブルックの再登場は極めて印象的な次の一行で始まる——

How far is it, my lord, to Berkeley now ?

(II. iii. 1)

リチャードの寵臣政治に不満をもつ貴族の一人でラヴンスパーグまで彼を出迎えたノーサンバランドへの問いである。パークレーは『エドワード二世』でのエドワード殺害の土地であるが、その連想がこの一行を不気味なものにしているといえはいいすぎであろうか。その城にはリチャードがいるわけではなく、王のアイランド遠征中国事を委託されたヨークがいるわけで、ボリングブル

ックの意識にエドワードがあったはずはない。第一の関門ともいうべきヨークとの対決を前にした緊張をそれは伝えるものであろう。しかし簡潔なこの一行をシェイクスピアはマーローの史劇への連想をもって書いたと考えるのも不当ではあるまい。上陸地点ラヴンスパーグからパークレーまでの道中、二人の間で何がいいかわされたかそれは判らない。そこにもまた奇妙なブランクがあって、ボリングブルックの心中は意識的にぼかされている。ここでもまた、ノーサンバランドのことばを通して彼の姿勢を推測する外はないのである。

These high wild hills and rough uneven ways
 Draw out our miles and make them wearisome;
 But yet your fair discourse hath been as sugar,
 Making the hard way sweet and delectable.

(4—)

先にはリチャードの悪意あるせりふによってボリングブルックの民衆への姿勢が語られたが、今度はノーサンバランドの函の浮くようなお世辞によって、彼の真の姿が捉えがたく思われる。しかしこれまたリチャードのせりふ同様、お世辞の分だけ割りきしてもボリングブルックの姿勢は大体の見当はつくというものであろう。事実このシーンでは、相次いで到来する貴族たちへのことばによって彼の態度は次第に鮮明となる。ノーサンバランドに対する彼の返答は、先に述べた「ことば」とその奥にあるべき実体という観点からみてたいへん興味ぶかい——

Of much less value is my company
 Than your good mords.

(19—)

これは謙虚なことばである。そして 'words' と 'value' の二つの語は、彼の意識の底に「ことば」への警戒がひそんでいることを物語っている。しかしながら、相次ぐ貴族の到来に謙虚さは次第に欽心を買うための装おわれた謙虚さへとになっていく。もっとも、ノーサンバランドへのせりふも装おわれた謙虚さであったかも知れない。パーシー、ロス、ウィロビーの到来、さらにウスターが王から離反したという報せ、パークレー城にはたいした軍隊がいなかった報告などがボリングブルックに自信を与え、それが彼のことばに次第に反映されていく。装おわれた謙虚さと自信の混合がそこにみられるのである。

Welcome, my lords. I wot your love pursues
 A banish'd traitor; all my treasury
 Is yet but unfelt thanks, which, more enrich'd,
 Shall be your love and labour's recompense.

(59)

‘unfelt thanks’ は65行では “thanks, the exchequer of the poor” という工合に表現されている。今は、報いたくてもただ感謝のことばしかないというのであるが、そのただのことばを以って彼は巧みに貴族たちの心を捉えようとする。しかもそこに用いられている ‘treasury’ ‘exchequer’ というイメージが、単なることばとは対照的な物的報酬——まさに ‘unfelt’ ではない——を暗示する。そして “as my fortune ripens with thy love” (48) とか “till my infant fortune comes to years” (66) といった工合に適当に卑下しながらかえって彼らの心を掌握する。とにかく、ボリングブルックは「ことば」と「実体」との違いを一応強調することで、逆に「ことば」の効力を最大限に利用しているわけである。ことばに対して警戒的である人は、それだけことばを利用する術を心得た人であろう。このことはさらにヨークとの会見、リチャードとのフrint城下での対面その他において一層明確となることであって、一般にリチャードを詩人的性格とするに対し、彼を行動の人と考えているが、リチャードはともかく、ボリングブルックをことばの効能をわきまえた達人とみるべきであろう。そしてこの場合、時に応じて寡黙も、いや沈黙ですら、ことばの有効な利用であるといえよう。

ふたたび「ヘンリ四世」を援用してこのシーンでのボリングブルックの姿勢に側面から光をあててみよう。パーシーはこの時のことを思いだして、彼を “this king of smiles, this Bolingbroke.” (IH4, I. iii. 246) と呼び、さらに

Why, what a candy deal of courtesy
 This fawning greyhound then did proffer me!

(251—)

と最大限の侮蔑を投げかけている。またしても ‘courtesy’ である。まさにこの語のもつ陰えいにふさわしく、みせかけの ‘courtesy’ にまどわされた憤まんを、パーシーは爆発させるのである。

二幕三場の後半は、事実上ボリングブルックの優勢を決定づけたヨークとの会見の場である。ヨークは当然なことながら、禁を犯して帰国したボリングブルックを法の名のもとできびしく詰問する。彼にとっては最大の関門である。一幕一場以来久しぶりの、そしてもう二度とはみられない雄弁をふるって彼は答える。父の所領回復以外に他意はないことを、先ず情に訴えるのである——

You are my father, for methinks in you
 I see old Gaunt alive. O! then, my father,
 (II. iii. 117—)

You have a son, Aumerle, my noble kinsman;
 Had you first died, and he been thus trod down,
 He should have found his uncle Gaunt a father,
 To rouse his wrongs and chase them to the bay.
 (125—)

次に法に訴える——

... I am a subject,
 And challenge law; attorneys are denied me,
 And therefore personally I lay my claim
 To my inheritance of free descent.
 (133—)

法に訴えることを臣下の権利だと考える思想は、この史劇でゴーストやカーライルが信奉する王権の絶対性と対照的に近代的な合理的精神を思わせる。この精神は、このシーンの終りの方で、ビュシー、バゴットの徒を “The caterpillars of the commonwealth” (165) と呼び、さらに三幕四場のヨークの庭園の場で庭師によって寓意的に語られる「コモンウェルス」の思想へとつながっていく¹³。その意味で、ボリングブルックが ‘kingdom’——リチャードは当然なことながらこの語を用いる——といわずに “the commonwealth” といったのは極めて暗示的である。ゴーストの抱く王の絶対性への信仰 (I. ii. 37—41) と君主国イングランドへの至情 (II. i. 40—68), また君側の奸を憎み、ボリングブルックを迎えようとするノーサンバランドのせりふにも

Wipe off the dust that hides our sceptre's gilt,
 And make high majesty look like itself,
 (II. i. 294—)

というように王のイメージが多い中で、突然ここでボリングブルックから発せられた “commonwealth” は、正直いって目をみはらせる新鮮さをもっているのである。

13. Go thou, and like an executioner, / Cut off the heads of too fast growing
 sprays, / That look too lofty in our commonwealth: / All must be even in
 our government. (III. iv. 33—).

「コモンウェルス」という語の発生は、‘commonweal’とともに16世紀であり、いわゆるチューダー王朝という絶対王制のもとで生れたことに素朴な疑問がいだかれる。当時の「コモンウェルス」の思想は、その語が現代の我々に与えるイメージ程に民主的なものではないことは当然であるが、16世紀の中頃に“Commonwealth men”と呼ばれる一群の思想家がおり、またやがて次の世紀には、王制を廃して正にその名を冠した共和政体の誕生をみるようになるなど、その根底にある精神は少なくとも神がかり的な絶対王制、ゴント、カーライルそしてリチャードその人のいう“anointed king”, “deputy of God”の思想とは相容れないものであろう。シェイクスピアの時代には、スコットランドの女王メアリーのイングランドの王位継承権をめぐるローマとの対立、スペイン、フランスの脅威といった外患、さらに国内のカトリック勢力の不穏情勢という内憂で、ますますエリザベスへの忠誠が要求されたのであった。¹⁴その結果暴君に対する謀反といえども不正であるという思想が時代の主流であった。一幕二場での、復讐を求めるグロスター未亡人に対するゴントの答え(37-41)は、この思想を背景とするものである。それはゴントだけでなく、シェイクスピアの全史劇を流れる一つの思想ではあるが、彼がはたして心からの信奉をそれに対していただいていたかは疑わしい。時代が要請する王の絶対権と、国民の権利を擁護する法の尊重との微妙なバランスの上に「コモンウェルス」の思想が次第に肉づけされていったと考えることが可能ならば、シェイクスピアの態度はまさにそうした思想を基盤とするものではないであろうか。

Shakespeare Survey 第17巻の“The commonwealth”といふ小論の論者フィリップ・スタイルズは次のように述べている――

Very few Elizabethans can have been in any doubt that rebellion was sin. But the nature and purpose of society are not described simply by defining the duties of its members: and, however unchal-

-
14. この時代の思想としてよく「秩序」—‘order’, ‘degree’—ということがいわれる。そしてその基盤に中世的な‘hierarchy’の思想があるとされる。「コモンウェルス」の思想は、いわばこの中世的‘hierarchy’のチューダー版といえないであろうか。ここでは権利と義務が等しく強調される。支配者の側は、単に権力を行使するのみならず、その義務の遂行もまた要請される。被支配者は、一方的義務だけでなく、権利——例えば法に訴える——もまた約束されるのである。この点に民主的な姿勢がうかがえるのである。
15. しかもこの王への絶対的忠誠の思想には宗教的色彩がきわめて強い。“anointed king”, “deputy of God”, “God’s substitute”といったことばにそれがあらわれている。新教国イングランドにとって、ローマ、スペインなど外国との対立にも、王位継承という国内問題にも、必然的に信仰の問題がからみ、そのため、愛国心と忠誠とが説教壇から熱っぽく説かれたのである。

lengeable its authority might be, government was thought of, not in terms of will, but of law.... the healthier the state of the commonwealth, the fewer laws would need to be passed. The main business of government, certainly the aspect of it with which the subject was most concerned, was the enforcement of law.¹⁶

王権の絶対制を肯定しながらも、なお法を尊重する合理的精神が「コモンウェルス」の思想であったというのである。そして引用した最後の部分が、ヨークに“gross rebellion and detested treason” (II. iii. 109) と責められたボリングブルックが臣下として法に訴える権利を主張する精神と全く符合することに注目したい。

ボリングブルックの思想が16世紀政治思想の一面の反映であることはともかくとして、性格として見た場合の彼の真骨頂は、ヨークが自分の無力を告白して中立を宣するや直ちに、ビュシー、バゴットを討つためにプリストー城に進軍することである。相手の弱味につけこみ、機をみて直ちに行動するすばやさが彼の著しい特長である。しかしながら、ビュシー、バゴットの断罪は、彼が自らの利益のために主張した法尊重とは矛盾した越権行為というべきで、このあたりから次第に野望がにおい始める。さらに重要なことは、彼らの処罰にあたって多くの人々に彼らの罪を明らかにすることによって自分の責任を軽くしようとする態度である。

... to wash your blood

From off my hands, here in the view of men

I will unfold some causes of your deaths.

(III. i. 5—)

この態度は後でリチャード廃位の場合でもっとも巧妙に発揮される。彼のもつ陰険ともいえる慎重さは、つねに“view of men”を最大限に利用するのである。それは、民衆の眼を意識した十分に計算された行動といっても過言ではない。

ウェールズの海岸に着いたリチャードが、次々と耳にはいる悲報に絶望する三幕二場について、いよいよボリングブルックと王とが会見するフrint城の場が来る。この小さな古城に王がたてこもっていると聞いて驚く一コマがあるが、これはシェイクスピアの創意である。ボリングブルックがノーサンバラ¹⁷ンドに命じて王を捕えフrint城に幽閉したというのが史実である。一見、シェ

16. Philip Styles, “The Commonwealth”, *Shakespeare Survey*, Vol. 17, pp. 111-112.

17. *Richard II* (Arden ed.), pp. 105-106.

イクスピアが彼を弁護しているかのごとくに見えるが、実は巧みな劇的效果によって彼の性格と野心を視覚化した一例である。彼にとっては思いもかけない王の存在——しかも小さな古城が、瞬間的に自己の優越を感じさせる。先にヨークの非力を知って間髪をいれずにブリストー城攻撃へと転じたように、今もまた機敏で適切な命令をノーサンバランドに与える——

Go to the rude ribs of that ancient castle,
Through brazen trumpet send the breath of parley
Into his ruin'd ears,...

(III. iii. 32—)

‘ruin'd ears’ は第一義的には城のはざまを意味するが、ボリングブルックの意識の中ではより強くそれは零落した王の耳であったであろう。古城と王の無力とが彼の意識に於て一瞬に結びつくのだ。帰国の目的が、無条件の追放解除と所領回復以外にはないことを告げさせ、もし認められないならば武力行使も止むを得ない、しかしそのようなことは自分の目的とするところではないと告げさせる——

The which, how far off from the mind of Bolingbroke
It is, such crimson tempest should bedrench
The fresh green lap of fair King Richard's land,
My stooping duty tenderly shall show.

(45—)

まさに慇懃無礼、法衣の下の鎧である。ノーサンバランドにはこう命じて、彼自らはくずおれた城壁から部下のきらびやかな甲冑が見えるように、しかし軍鼓の音はたてずに軍を進める。王との対決を空をつん裂く火と水との二大元素の衝突になぞらえながら、自らはあえて水に甘んじるところに、彼の満々たる自信がうかがえよう——

Be he the fire, I'll be the yielding water:
The rage be his, while on the earth I rain
My waters; on the earth, and not on him.

(58—)

すでに王リチャードをのんでかかっているのだ。‘rage’ は王の絶望的な怒りであろうが、彼はもはやそれには目もくれず、水は大地に注ぐのだという。一幕一場で、ボリングブルックとモーブレーの口論に、“Rage must be withstood” (I. i. 173) といったリチャードが皮肉にも思いだされる。‘yielding’ は一義的には一歩王に譲歩するという意であるが、その奥には大地に水を注ぐという

イメージから 'rage' とは対照的に生産を暗示する意味もあろう。そこにはすでに民衆を意識した国家統治の意志が読みとられるのである。

火と水との激突を思わせたリチャードとの対決は、少くとも表面的には平穩の中にすむ。王が彼の要求を意外にも素直に認めるからである。この王の意外な弱腰にボリングブルックはふたたびつけ込んで、城壁下での会見を申し込む。リチャードは自嘲の思いでボリングブルックのことばを反復しながら、心とは裏はらの行動にでる――

In the base court? Come down? Down, court! down, king!

(182)

かくて二人の再会は、二大元素の空をつん裂く激突どころか、あっけない20数行の応酬でおわるのである。ひざまずくボリングブルックの心の中を見抜いたように

Fair cousin, you debase your princely knee
To make the base earth proud with kissing it :
Me rather had my heart might feel your love,
Than my unpleas'd eye see your courtesy.

(190)

一方ボリングブルックはことば数少ない――先にヨークに対した時のような雄弁はもはや必要ではないかのように。彼はただ、"for mine own", "mine" と繰り返す。ここでは もはや ことばは 不必要であることを心得ているのである。相手の心を見抜いているのはリチャードではなく、むしろ彼の方がリチャードの心を見抜いているのだ。そしてただ静かに相手の出方をうかがうのである――

Cousin, I am too young to be your father,
Though you are old enough to be my heir .
What you will have I'll give, and willing too;
For do we must what force will have us do.
Set on towards London. Cousin, is it so?
Yea, my good lord.

Then I must not say no.

(204—)

「ロンドンへ」でリチャードは譲位をほのめかしたものであろうが、ボリングブルックは繰り返し述べた誓いにもかかわらずあえて否定しようとしな

のはどうしてであろう。責はリチャードその人に負わせ、自分ではできるだけ言質をとられまいとする慎重さがここにもうかがえる。

二人のこの対話に関するかぎり、王位は求めずして転がり込んで来たかの感
 はたしかに強い。しかしだからといって、D. ウィルソンのように、「運命の
 車輪」の思想に立ってボリングブルックに何の‘deep design’をも認めようと
 しないのは承服しがたい。¹⁸もちろん『リチャード三世』に於けるような野望と
 その実現のための露骨な篡奪劇はここにはない。だがりチャード三世のそれが、
 いわば小児的でコミカルであるに對し、ボリングブルックの時の流れに逆わ
 ず、巧みに機に乗じ、相手次第でことばを自在に操つるやり方は狡猾な印象を
 与えずにはおかない。それは好意的に表現すれば、いわゆる大人のリアリス
 トの方法であろう。ボリングブルックほど、人間的好悪によって評価の極端に
 異なる性格はないであろう。このシーンでリチャードが評した“know the
 strong'st and surest way to get” (201) ということばが、彼に対する客観的
 な観察であるのも皮肉である。彼の王位への野望がどの段階に於て芽生えたか
 についていろいろ臆測されるのも、シェイクスピアが意識的に彼をつつんでいる
 曖昧さに由来する。

実権を掌握したボリングブルックの政治は、ふたたびグロスター殺害事件
 を裁くことで始まる。捕われのバゴットを証人に、リチャードの共犯者を追求
 する。バゴット、オーマール、フィッツウォーター、パーシたちの間で激しい応酬
 が続いた後で、モーブレーを帰国させて嫌疑のかかったオーマールと対決させ
 ようとする。開幕冒頭と酷似した局面であるが、それだけにリチャードの裁き
 との対照も著しい。モーブレーの所領までも回復させようという寛大さは、リ
 チャードとの対比を誇示するスタンド・プレーに思われるし、またリチャード
 の側近としての従弟オーマールをモーブレーと対決させておとしいれるぐらい
 のことは、彼の意中にあつたであろう。正義と寛大を装ったこのこと自体一
 種の演出であつたといえよう。

この演出は、同じ場 (IV. i.) 後半のリチャード廃位のシーンに到って一層
 明白となる。実権を握るまでは時流に即してやって来た彼は、これからは仕組
 まれた芝居によって王座の安泰を計るのも興味ぶかい。哀れなのはリチャード
 である。もっともパセティックなシーンはこうした演出のもとで展開する。

先ずヨークが登場してリチャード退位の意志を告げ、ボリングブルックをヘ
 ンリ四世の名で呼び、彼は神の名で王座に上ることを承諾する。しかしカーラ
 イルの激しい非難と、英国にふりかかるであろう呪いの予言にあう。だが王が
 臣下によって、しかも王の不在のまま裁かれることの不正を責めるカーライル

18. *Richard II* (New Shakespeare ed.), pp. xx, xxxvii.

の言は、皮肉にもボリングブルックの思うつぼである——

Fetch hither Richard, that in common view
He may surrender ; so we shall proceed
Without suspicion.

(IV. i. 155—)

またしても “in common view” であり, “without suspicion” である。彼の即位を正当化するために、ヨークはリチャードの意志、つまり後継者として彼を指名したことを強調する——“Ascend his throne, descending now from him” (111) ——に対し、彼はより強く民衆の同意を求めるのだ。そこには、事自体の正邪ではなく、一般民衆の納得と同意によって事を決着させ、自己の行為を正当化させようとするリアリストの姿勢がうかがわれる。これは民衆尊重というよりは民衆を利用する態度である。後はもっぱらノーサンバランドを進行係にこのいわば劇中劇は進行する。彼自身はただノーサンバランドの影にかくれて適当に糸を操つるといった工合だ。リチャードは自分の失政の数々を読みあげ、廃位もまた止むを得ないことだと人々に思わせるという屈辱を強いられる——“the souls of men / May deem that you are worthily depos'd.” (226)

仕組まれた譲位劇は、ことば少なく、そして冷たくみつめるボリングブルックの眼前に、手鏡を投げつけるというリチャードの大仰な仕種でおわる。

Mark, silent king, the moral of this sport,
How soon my sorrow hath destroy'd my face.

The shadow of your sorrow hath destroy'd
The shadow of your face.

(290—)

ボリングブルックの非情なせりふもさることながら、リチャード自らも “this sport” と認めるこの仕種は、この劇中劇が意外にも喜劇的な性格を帯びたものであったことを暗示する。そもそもそれは計算された筋書き通りに展開し、我々は演出するボリングブルックの目を通してリチャードをみつめるように強いられる。リチャードは全くの操つり人形にすぎず、事の結末はすでに見えすいていて何が起るかわからないといった不安とサスペンスはないのである。筋書きになかったことといえば、リチャードが彼に乞うて手鏡を取りよせ、自分の顔をつくずくと眺めた後でヒステリックに床にたたきつけたことであろう。リチャードとしてはそうすることでやっと自分の愚劣の数々を読みあげる屈辱

から逃れたわけだが、しかしそれは一層の侮蔑を勝者ボリングブルックにいかせたにすぎない。

次に彼が登場する五幕三場は、巷に出入りして久しく顔を見せない王子ハリーの消息を気遣うところから始まる。父ゴントとの別れの間 (I. iii.) 以来始めてヒューマンな肉親の感情を見せるわけだが、そこへ前場でのオーマールの陰謀発覚騒ぎの連続として、先ず本人が次いで父ヨーク、次に母親がかけこんで来る。新王に早くも訪れた陰謀を彼がいかに裁くか、これがこのシーンの焦点であろうが、これまた喜劇的局面で展開する。肉親の愛情を犠牲としてまであくまで子の処罰を主張するヨークと、ただひざまずいて、王の許しがあるまでは立ちあがらないと懇願する公爵夫人——まさにボリングブルックのいう “The Beggar and the King” (V. iii. 79) の場である。

ヨークの忠誠は、かつてのゴントの愛国の至情から発する叫びとは違って我々の心に訴えては来ない。しかもヨークのレトリカルなせりふも母のひたすら情に訴える懇願も、オーマールを許すに当ってのボリングブルックの意志決定にとっては実は必要のないことだったのだ。彼は二人の親の来る前にすでに次のようにいっている——

Intended or committed was this fault?

If on the first, how heinous e'er it be,

To win thy after-love I pardon thee.

(V. iii. 32—)

それだけに、その後続く父と母との忠誠と愛情の応酬はこっけいにみえて来る。

先にモーブレーの追放を解こうとし、いままたオーマールを許す寛大さは、そのこと自体はまさにヨーク夫人のいうように、王にふさわしい美德ではある。しかし “to win thy after-love” とはまたボリングブルックらしいやり方である。このシーンは一般にあまり評判のよくない場で、劇的構成の緊密な点で高く評価されているこの史劇の中で、むしろ欠点であるとさえ考えられている。¹⁹しかし視点を変えれば、ボリングブルックの新体制がヒューマンな人間関係を犠牲とした秩序とモラルの上に立っていることをこのエピソードは暗示している。謀反の相次ぐ新王統治の時代に於ては、ヨークのしめすたぐいの忠誠が要請されるのである。一方、ボリングブルックの寛大を、Geoffrey Bullough

19. このシーンへの批判は多いが、「エドワード二世」と比較した Virgil K. Whitaker を引用しよう。“Richard II does not seem to me so powerful a play as Edward II, but its structure, except perhaps for the Aumerle episode, is certainly clearer and more artful.” *The Mirror up to Nature* (San Marino, 1965), p. 95.

のように Sir Thomas Elyot が讃える為政者の美德 ‘placability’ の典型とみるのは、あまりにも額面通りにとりすぎた見解であろう。彼はまたヨークまでも *The Governor* の同所に記されている、王子を法の裁きにふした裁判官に感謝するヘンリ四世になぞらえている²⁰。いずれもこのシーンのもつアイロニカルな調べを無視した見解というべきである。ブローとは完全に対照的に、ある評家はヨークの動機を ‘self-interest’²¹ をみ、また ボリングブルックの寛大さを、リチャード殺害を考慮した “an attempted purchase of indulgence in advance”²² とみる人もある。同じ問題をめぐって、こうしたまったく相反する見解の相違がでて来るのも、やはり作者の意識的な曖昧さに原因するのである。

オーマール一味の陰謀は、王にリチャード殺しを決意させる。といっても例によってボリングブルック自らが決意を語るわけではない。彼には独白というものがない。我々はエクストンのせりふで知るだけである――

Didst thou not mark the king, what words he spake?
‘Have I no friend will rid me of this living fear?’
Was it not so?

(V. iv. 1—)

これはいわば間接的な独白である。しかもふつうの独白に見られないかげをただよわせている。たとえば、同じ局面における『エドワード二世』のモーティマーの独白と比較しよう。

The king must die or Mortimer goes down;
The commons now begin to pity him.
Yet he that is the cause of Edward's death,
Is sure to pay for it when his son's of age;
And therefore will I do it cunningly,
This letter, written by a friend of ours,
Contains his death, yet bids them save his life.

(V. iv. 1—7)

これは21行にわたる独白の始めの7行であるが、続けて句読点の打ちようで二様にとれる文面で逃げ道をつくり、刺客ライトボーンも王の暗殺の直後殺される仕組になっている、と独白する。このように自分の意図を明白に語るのが独白本来の姿であるが、そのために却って迫力に欠ける場合もでてくるであら

20. Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* Vol. III (1960), pp. 364-5

21. *Richard II* ed. by John M. Lothian (The New Clarendon Shakespeare), p. 173

22. Harold C. Goddard, *The Meaning of Shakespeare* (1962), Vol. I. p. 158.

う。ボリングブルックの場合、作者は意識的にこのたぐいの独白を避けることによって、別種のかげと暗さを彼に与えるのである。またモーティマーが手紙を用いるに対して、ボリングブルックの方は口頭による明確な命令という形をとらず、ただ思わせぶりな態度で意中を悟らせているのは注目しに値する。その手紙が決定的証拠となってモーティマーの罪が発覚するのと対照的に、ここにもボリングブルックの用心深さがうかがえるからである。謀略を用いて王を殺すどころか、刺客をも有無をいわず殺してしまおうという独白であるにもかかわらず、モーティマーの独白の調べは意外と明るい。少なくともボリングブルックの後めたさはないといえよう。ましてエックストンの行動を、自分と英国に汚辱を与えるものだといひ、さらに――

They love not poison that do poison need,
Nor do I thee: though I did wish him dead,
I hate the murderer, love him murdered.
The guilt of conscience take thou for thy labour,
But neither my good word nor princely favour:
(V. vi. 38—)

というのは身勝手すぎるであろう。罪ほろぼしに聖地巡礼にでかけたいという思いは決して嘘ではないであろうが、何か空しく響くのである。

開幕冒頭では正義の名のもとでグロースター殺害の罪を激しく弾劾したボリングブルックではあったが、王位につくやそれにもまさる罪を犯す。政治の世界に於てはそれもまた止むを得ないことであつたかも知れない。ヨークの忠誠に見られたように、政治の論理はしよせんヒューマンなものとは相容れないものであろう。リチャード殺害に先立ってオーマールを許し、またその後では“High sparks of honour” (V. vi. 29) に免じてカーライルを許したのも、あるいはリチャード殺しの罪を幾分でも軽減したいとする気持からであつたかも知れない。ともかく腹の中を語らないボリングブルックは、いろいろの臆測をさそうのである。しかしオーマールやカーライルへの寛大さにも増して、刺客エックストンへの処置は大きな謎をひめている。先にも述べたように、エックストン追放には、グロースター殺しの真の責任者であるリチャードはついに一度も責めず、ただ下手人ともいうべきモーブレーをひたすら責める精神と通じるものがある。その意味でリチャードへの態度は、皮肉にもリチャード殺しの自分への寛大さにつながるものかも知れない。極言すれば、ボリングブルックには、正義とかモラルとかいったものへの意識が欠けているともいえよう。少くとも、リチャード殺害に到るまでの彼にはそれはいえよう。しかし、この最後の局面に於けるボリングブルックには、割り切れないものが多分にただよ

っている。そしてカインへの言及はその複雑な心理を反映するものであろう。

モーティマーはエドワード殺しの直後に刺客ライトボーンをもなきものとする手はずを整えるが、そうした情無用、問答無用の行き方も一つの方法であろう。そしてそれがモーティマーにふさわしい行動であった。ボリングブルックにはこのたぐいの明快さと単純さを見ることはできない。リチャード殺しの報酬として彼が与えたものは罪の意識を荷なつての追放である。ある意味では、ライトボーンの運命はまだ救われよう。生きつづけねばならないエリックストンこそ惨めである。しかしそれではボリングブルックはあまりにも身勝手であり、エックストンはあまりにも哀れである。カインとともにさまようのは、エックストンの中に投影されたボリングブルックその人ではないであろうか。エックストンとともに、自らの分身をも彼は追放しようとしたのではないであろうか。いずれにしても身勝手ではある。しかし彼としては、そうすることによって始めて政治の世界に生きねばならぬ人間として、政治と良心の矛盾を乗りこえようとした、と考えることもできるのではなかろうか。しかしながら、この大詰のせりふは別として、彼には王位というものが持つ責任への反省、王という立場に対する倫理的な意識が欠けていることは否定しえない事実である。このことは当然なことながら、王位へ思惑がついに彼の口から語られなかったことと無縁ではない。リチャードの王としての誇り——それはしよせん白鳥の歌にすぎないものだが——に比較されるなにもものも、ボリングブルックのことは求めることはできない。彼の帰国の目的が王位への野望であったというのではないが、彼の心にそれが徐々に芽生えていったと想像されるにもかかわらず、彼はそれを語ろうとはしない。この事実は野望否定説を勇気づける好材料ではあるが、その代償に、彼の内省の欠除を、とりわけリチャード廃位に対する倫理的な内省の欠除を強く印象づけるものである。「ヘンリ四世・第二部」に於て、王子に対して

God knows, my son,
By what by-paths and indirect crook'd ways
I met this crown; and I myself know well
How troublesome it sat upon my head:

(2H4, IV. v. 182—)

と自らの罪を認め王冠の重みに苦悩する同じボリングブルックとは大きな違いである。この政治的そしてまた倫理的意識の世界の欠除が、「リチャード二世」の奇妙な空洞ともいえよう。彼の行動を正当化し、そしてこの空洞を幾分かでも埋めようとするのが、ほかならぬヨークの存在である。

3

ボリングブルックに対する解釈に両極があるように、ヨークに対してもいろいろと意見がわかれる。すでに述べたように、息子オーマールの陰謀に対してとった処置のごときは全く相反する解釈が可能である。たしかに彼にもまたある程度の暖昧さが感じられる。しかしリチャードからボリングブルックへの忠誠の移行は必ずしも描写不十分とはいえないであろう。その移行を自然なものに思わせる性格が、一貫して貫かれているからである。

ヨークはゴントとちがって、リチャードの性格と失政に対しては始めから迷を投げている。性格的にもゴントの激しさはなく、どちらかといえば事なかれ主義に近く、よくいえば平和主義者の印象を与える。リチャードからボリングブルックへの政権授受が一応平和裡にすすめられたのはヨークのこうした性格によっているといえよう。しかしリチャードがゴントの死後その財産を没収しようとした時には、さすがにことばきびしく直諫する——

You lose a thousand well-disposed hearts,
And prick my tender patience to those thoughts
Which honour and allegiance cannot think.

(II. i. 207—)

ここには絶対的忠誠とは異なるニュアンスがある。しかしリチャードのヨークへの信頼は厚く、彼に国事を委ねてアイルランドに向かう——“he is just, and always loved us well.” (221) 王のゴントへの反撥と比較してみると、そこにヨークの性格が浮かびあがって来る。直諫を自分への攻撃と感じさせないムードをヨークはもっているであろう。しかしそれは逆にきびしい誠実さの欠除をも暗示するものである。このことは次のせりふにあらわれている。あくまでもゴントの財産を没収するというリチャードに対して——

I'll not be by the while: my liege, farewell:

(212)

没収の行われている間、自分はそこにいないというのだ。理非曲直はじゅうぶん弁えながら、終極の責任は取りたくないという姿勢である。いささかヨークに対し酷ではあるが、少なくとも命を賭して正義に殉じるタイプの人間ではないようだ。この姿勢は二幕二場そして三場と形勢がリチャードに非となるに従って一層明白となる。彼がきまって自己の無力——老令と兵力の無力——を訴えるのも彼にとって不利な印象を与えずにはおかない。それが責任回避のいいのがれとひびくからである。

ボリングブルック帰国の報に、王妃、グリーン、ピュシーらを前にして彼は

いう——

Here am I left to underprop his land,
Who, weak with age, cannot support myself.
Now comes the sick hour that his surfeit made;
Now shall he try his friends that flatter'd him.

(II. ii. 82—)

当の倭臣たちを前にしての言である。すべては王の責任だ、ともいいたげであり、すくなくともビュシーたちとともに戦う気持はなさそうである。この危機に於けるヨークの気持を臆測させる一行がある。上記引用のせりふに直ぐ続けて、召使いが登場して息子オーマールがすでにアイルランドに出発したと知らせる。彼は絶望的に叫ぶ——

He was? Why, so! go all which way it will!

(87)

貴族たちは去り、やがて民衆もボリングブルックに走るであろう、と後が続くところから、一見、王のためを思つての絶望の叫びにとられそうである。彼はこの危機に際して、一体何のためにオーマールを呼びにやったのであろうか。息子とともにボリングブルックを迎えうつためか、それともオーマールとともに、しばらく形勢を見守るためか。局面は第二の解釈を許しそうである。形勢は王に不利であることを弁えているヨークとしては、新たな実力者となるであろうボリングブルックに対して、我が子をむざむざ不利な立場に追いこみたくないであろう。せめて自分のそばに留めておきたい、しかし海の彼方に行ってしまったとあつては致し方ない。そうした絶望と自棄の思いがこの一行となつてあらわれたのではないであらうか。彼は後に、王となつたボリングブルックに対してオーマールのために弁じた旨伝えるせりふ (V. ii. 41—45) もあり、また同じところでオーマールに新王への忠誠をすすめている (50—51) 事実から、両者の関係にはずいぶんと気を配っていたと考えられる。しかし結局は、皮肉にも子への愛情を犠牲としてまでもオーマールの処罰を主張するに到るわけである。

この危機に於てのヨークの動揺はおおうべくもないが、二人の甥に対する微妙な心の中は、同じく二幕二場のせりふに示されている。ビュシーとグリーンに兵を集めるよう指示し、自分としてはどう行動してよいかわからないというところである。

Both are my kinsmen :

The one is my sovereign, whom both my oath
And duty bids defend ; the other again
Is my kinsman, whom the king hath wrong'd,
Whom conscience and my kindred bids to right.

(111—)

先に引用した二幕一場の諫めのせりふの中では、王への姿勢を 'honour' と 'allegiance' で表明したヨークは、ここでは、'oath' と 'duty' という概念でそれを示す。人間関係の結びつきの度合という立場からいえば、'oath'や'duty'の方がより義務的な性格が強いと考えてよいであろう。それだけに発言者の心情に冷たさも感じられる。一方ボリングブルックに対しては、'conscience'と'kindred' という語でよりヒューマンな感情を示している。²³ リチャードに対する気持の微妙な変化と、彼ともう一人の甥にいただく感情のちがいをこれらは暗示していると考えたい。

パークレーでのボリングブルックとの会見では、ヨークは謀反人呼ばわりしてきびしく甥を非難する。しかし結局はここでも自己の無力を告白して中立を宣言する。王の代理が中立を宣言するということは、実質的には王を裏ぎったことにほかならない。自己の無力を強調することは、責任回避の常套手段であるが、この場合はそれにも増して当の相手のボリングブルックにつけ込む様子を見せるようなものである。そこまでヨークが計算したと見るのはあまりに悪意ある解釈であろうが、"Were I but now the lord of such hot youth" (99), "Now prisoner to the palsy" (104), "my power is weak and all ill left" (154), "if I could" (155), "since I cannot" (158) という工合に繰り返されては、ボリングブルックならずともヨーク組し易しと思うであろう。間髪をいれないボリングブルックのブリストー攻撃言明に、ヨークは答える——

It may be I will go with you; but yet I'll pause;
For I am loath to break our country's laws.
Nor friends nor foes, to me welcome you are:
Things past redress are now with me past care.

(II. iii. 168—)

23. リアのコーデリアに対する怒りは、彼女の "I love your majesty / According to my bond ; nor more nor less." (*King Lear* I. i. 94-95) というせりふに原因した。'bond' という語のもつ義務的な冷たさは否定できない。それはヨークのいう 'duty' と 'oath' に似ている。

先には “I'll not be by the while.” といい、いままた “yet I'll pause;” という。いずれの場合も、自分の手は汚したくはないのである。国の法を犯したくはないのなら、おのずとほかに方法もあるであろう。しょせん彼は洞ヶ峠をきめこむタイプの人間である。最後の一行は “Past cure, past care” という諺からきている。危機を回避するのにこうして安易にも諺を用いて逃げるところに、努力を放棄した人間の姿勢がうかがえよう。

プリストー攻撃への同道を断わったヨークは、同地でのビュシー、グリーン
の裁きの場 (III. i.) にはすでに姿をあらわし、しかも ボリングブルックに対
して何のいましめも示さない。それどころか彼の意を体していそいそと王妃へ
の配慮に努める。もう忠勤を励んでいるかのようだ。フリント城のシーンで
は、ボリングブルックとの間に興味ある応酬がみられる。ノーサンバランドが
王をリチャードと呼びすてにしたのを、ボリングブルックがかばったことから
次の対話が交される——

Take not, good cousin, furthur than you should.
Lest you mistake: the heavens are o'er our heads.

I know it, uncle; and oppose not myself
Against their will.

(III. iii. 16—)

王との対決を前にして、臣下としての道を誤ることのないよう誠めたものである。しかし我々はすでにヨーク自身国の法を犯したくはないといいながら、現実にはどんな道を取ったかを知っている。ボリングブルックにしても、すでに見たようにすくなくとも形とことばの上では、じゅうぶん臣下の礼をつくしてリチャードに対するのである。いずれにしても、これはボリングブルックへの警戒心を示すものではなく、好意ある忠告のたぐいである。肝心の両者の対面に際しては、彼はただ涙するばかりで、逆にリチャードから慰められる始末だ。その涙はリチャードの零落をあわれむ涙であり、また自分の背信を詫げる涙でもあろうか。しかし彼は、当然経験したであろう心中の葛藤を何も語らない。

フリント城でのリチャード退位の意志表明ののちのヨークにはもはや心の葛藤は想像することさえできない。四幕一場の廃位場で、王退位の意志を伝え、新王をヘンリ四世の名で呼び、さらにリチャードを王の前に案内して来るのもほかならないヨークである。しかもリチャードを “plume-pluck'd Richard”

24. リチャードはヨークに対して次のようにいっている—— “Uncle, give me your hand: nay, dry your eyes; / Tears show their love, but want their remedies.” (III. iii. 202-3) 王は彼に対しては奇妙に寛大である。

(108)と呼び、さらにリチャードその人に向って、“To do that office of thine own good will / Which tired majesty did make thee offer:” (177—)とは非情なせりふであろう。それにしても、ヨークが王冠授受の仲介人としてリチャードを説得するシーンが舞台に上らないのは何故であろうか。『エドワード二世』の五幕一場は、モーティマーよりの使者のウィンチェスターの司教とトラッセル、さらにエドワード幽閉を命じられてはいるが王に対して同情ある態度をしめすレスターたちを相手に、エドワードが王冠への執着をしめすもっともパセティックなシーンである。それに対し『リチャード二世』では、リチャードをボリングブルックに直接対面させて王冠を手渡させるという方法を取っている。もしヨークをして説得させるシーンがあれば、おそらく彼とて涙なくしてはそのことに当れないであろうし、従って彼の人間像はおのずと変ったものとなるはずである。しかしながら現に見るヨークは、大勢に順応して次第に旗色を鮮明にし、決定的瞬間に臨んでは骨のあるところは何もしめさず、変節に対しても深い葛藤をしめさない。ついにはリチャード廃位の劇中劇の開幕係りを演じるのである。

五幕二場の前半、つまりオーマールの陰謀発覚に先立つヨーク夫妻の対話は、ボリングブルックとリチャードのロンドン入りの回想である。両者のロンドン入りは、当然なことながら、リチャード廃位の間(V. i.)に先行する。ヨークは勝者のりりしい馬上姿を、そして敗者リチャードのあわれな姿を涙でとぎれとぎれにかたりながら、しかしと続ける——

But heaven hath a hand in these events,
To whose high will we bound our calm contents.

(V. ii. 37—)

これが先に引用したフリント城での警告“the heavens are o'er our heads.”と同一人の言であるとは、シェイクスピアもずいぶん皮肉だといわねばならない。すべてが終ってしまったいまとなってもっとも重大であるはずの問題をこうして回想の形で語るところに、しかも何よりも神の御心を持ちだすことによって現実を肯定しようとするところに、すでに強調したヨークの姿勢がうかがえるのである。すべてを神に帰するというが、それは謙虚で敬虔な心情——たとえばハムレットに於けるような——からではなく、安易な現実妥協の精神からであろう。それは先に、諺を用いることで現実から逃避しようとした精神となら変るところはないのである。いずれも責任転嫁のいいのがれの弁にすぎず、自己の努力の欠除を巧みに天の意志にすりかえることにほかならない。だがこれもまたリアリストの姿勢であろう。ただ、ボリングブルックはつねに情勢を見つめ、機敏に行動し、そして運を呼びこむタイプのリアリストであるに

対し、ヨークは時の流れに一步おくれてついて行き、つねに形勢を窺望する型のリアリストである。

王の交替を天の意志とみるヨークのせりふは、この問題について何も語らないボリングブルックの代弁でもあるうか。ふたたびフリント城の二人の対話を思いだそう。ヨークに誠められてボリングブルックは“oppose not myself / Against their will”と答えた。彼は王位についた後もなお、自分の行動をそのように考えているのであろうか。この史劇に関するかぎり、彼の意中は謎である。

オーマールの陰謀に対するヨークの態度は親の情として不自然であることはすでに述べた。あるいは、彼の意識の底に潜むリチャードへの背信という道德的負目が、逆に新王への異常な忠誠という形であらわれたのだといっていえないこともないであろう。いささかうがちすぎの嫌いはあるが、これも一つの心理的解釈である。しかしより劇的な視点から見れば、このエピソードはボリングブルックのリチャード殺害と同じように、国の秩序と王への忠誠がヒューマンな人間感情に優先するという政治の世界の論理のアレゴリカルな表現であろう。たとえば次のせりふなどは、まさにこの論理を教える以外のなにものでもない――

If thou do pardon, whosoever pray,
More sins, for this forgiveness, prosper may.
This fester'd joint cut off, the rest rests sound;
This, let alone, will all the rest confound.

(V. iii. 82—)

先に述べたように、ボリングブルックにはオーマールを許す気持はすでにあったのである。その後の不必要とも思われるヨークとその妻との応酬のこっけいさはアレゴリカルなものが持つこっけいさといえるであろう。

4

リチャードを語ることなしに「リチャード二世」を論じることにはできない。帰国後のボリングブルックに変貌が見られたように、リチャードにもアイルランド遠征の前後に著しい変貌が見られる。運命は二人の性格に等しく神秘的な変化を与えるのである。

25. Harold C. Goddard, *The Meaning of Shakespeare*, vol. I. p. 158. “Back of York's regard for his pledged word is his treachery to Richard when he was regent.... He has projected his own sense of guilt on his son and demands for him the penalty he will not admit he himself deserves.”

一幕のリチャードには、王としての威厳と折々見せるパーソナルな地金とが奇妙にアンバランスである。レトリカルなせりふの合間にちらりと顔をのぞかせる人間リチャードは決して好ましいものではない。ボリングブルックへの個人的嫌悪のさせるわざかも知れない。彼に対してモーブレーの罪状を挙げさせるに先立って――

It must be great that can inherit us
So much as of a thought of ill in him.

(I. i. 85—)

といっているように、始めから敵意と軽蔑を以って対するのである。こうしたせりふから見ても始めから事を真剣に取りあげる意志はないかのようなだが、リチャードの態度は両者互いの非難攻撃が激した時に於ても一向に変わりはない――

Wrath-kindled gentlemen, be rul'd by me;
Let's purge this choler without letting blood:
This we prescribe, though no physician;
Deep malice makes too deep incision:
Forget, forgive; conclude and be agreed,
Our doctors say this is no month to bleed.

(152—)

いかにも人を喰ったせりふだ。これではいよいよ二人の激情をおおるばかりで結局コヴェントリでの決闘ということになる。ボリングブルックへの個人的嫌悪を差しひいても、王としての威厳と人間リチャードのアンバランスは感情的に不安定な人間像を描きだしている。三場での決闘の一方的中止命令は、その動機としてモーブレーの勝った場合とボリングブルックの勝った場合とへの思惑などいろいろと想像されるが、劇的視点から見れば、それはリチャードの恣意的性格を一そう際立たせる効果をもっている。そして両者追放の理由として、平和な国土にいたずらに血を流すことへの憎しみを語るレトリカルなせりふは空々しい。かくて彼は気骨ある臣下を自ら失うこととなる。モーブレーが去るや否や、ボリングブルックの追放期間を軽減しようという。ゴーンツの涙を見ての同情からとはいっても、そこにゴーンツ父子へのこびに近い心理も感じられるのである。しかもかえってボリングブルックの反撥と不信を増大させるだけである。このように二つの公的な場でリチャードには、すでに性格上の弱さが見られるが、四場での気のおけない寵臣たちとのシーンでは、当然なことながら誰はばかりとなくその愚かさを発揮する。彼らに囲まれてい

るかぎり、国王の威厳を保つ必要も身構える必要もないわけだ。ボリングブルックの民衆との別れを語るリチャードのせりふは、すでに論じたように、彼の民衆へのポーズを看破するものではあった。しかし同時にそれは、彼自身の民衆蔑視という王としての致命的欠陥を暴露するものでもあった。それにも増して、その語り口はリチャードその人の品性を下げるたぐいのものでもある。冒頭 “We did observe” と語り始め、オーマールの姿を見て話かとぎれ、20行目でふたたび “Ourself ‘and Bushy... / Observ’d” とボリングブルックが民衆と別れるところを見たというのだ。取り巻き連も悪いが、公儀から開放されたリチャードがこうしたせりふでいきなり登場して来ると、いやに卑小な印象を与えずにはおかない。ゴーントの病い重しと聞くと――

Now, put it, God, in his physician's mind
To help him to his grave immediately !

(I. iv. 59—)

すでに彼の心には、アイルランド戦争の軍資金としてゴーントの財産没収がひらめくのであるが、それにしてもまことに冷酷非情のことばである。

二幕一場でのゴーントの直諫も、彼の耳にはまるで馬耳東風、祖父エドワードや父黒太子時代のイギリスの栄光に目覚めさせようとする叔父の忠告に背を向け、あまつさえ、その死の報に、

The ripest fruit first falls, and so doth he :
His time is spent ; our pilgrimage must be.
So much for that. Now for our Irish wars.

(II. i. 153—)

とこれまた非情である。

いま、こうして古いイングランドの栄光を知るゴーントに対して、耳を閉じしてしまうリチャードがやがて苦境に立った時、イギリス国王としての誇りのかずかずを口にするのも皮肉である。しかしゴーントの愛国の至情には、多分に過去の栄光への郷愁が感じられる。それはすでに失われたものへの老人の郷愁にはかならない。リチャードが王としての威光が失われ始めた時になって、始めて王の神聖と栄光を語るのは、ゴーントの古い英国への郷愁と同じである。その意味に於て、ゴーントの死は古い英国の完全な終焉を意味するといえよう。またそれは、古い王の観念の終焉をも象徴する。ボリングブルックの王座は、皮肉にも父の死によって約束されたのである。

次にリチャードに接するのは三幕二場、アイルランドよりウェールズの海岸に帰り着いたところである。ヨークはすでにボリングブルックと合流し (II,

iii.), 頼みのウェールズの精兵は去り (II. iv.), グリーン, ビュシーらの
 流臣はすでに亡く (III. i.) といった情勢に於てである。注目すべきことは、
 これらの悲報を次々とリチャードが知らされる仕組になっていることである。
 我々はすでに知っている。誇張すれば知らないのはリチャードひとりなのだ。
 ヨークの庭園の場での王妃の歎き——

Nimble mischance, that art so light of foot,
 Doth not thy embassy belong to me,
 And am I last that knows it?

(III. iv. 92—)

はそのままりチャードの歎きであつたろう。つまり彼は帰国と同時に運命をひ
 たすら受けいれるがわに立たされたのである。彼としては、積極的な行動にで
 たくとも、もはやでようもないほどに決定的に運命づけられているのだ。彼が
 この後、ボリングブルックに対してつねに受身の立場に立つのも帰国の場に於
 て決定されたこの約束によるといえよう。いわば「受動」の運命を強いられ
 れたリチャードは、ただむなしい栄光にすがり、そして悲しみをかたり、叫
 び、訴えるほかはない。リチャードの悲劇はこのようなカラクリによって劇的
 に規定されているといつても過言ではない。

祖国の土をふみしめた喜びを彼はすなおにそして美しくかたり始める。久し
 ぶりに子と再会した母の涙とほほえみを以って彼は大地に叫びかける。それは
 またきわめて感覚的でもある。一幕で見たあの冷酷なリチャードとは全くの別
 人である。しかしといひ大地——“Dear earth” (6), “my earth” (10),
 “my gentle earth” (12) ——が謀反の徒に踏みにじられているという思い
 は、次第に彼を興奮させてゆく。“spiders” (14) に “toads” (15) に “nettles”
 (18) にそして “adder” (20) に「お前達の王」のために働いてくれと呼びか
 けるのである。

Mock not my senseless conjuration, lords:
 This earth shall have a feeling and these stones
 Prove armed soldiers, ere her native king
 Shall falter under foul rebellion's arms.

(III. ii. 23—)

リチャードのこのような虫や草や石などへの呼びかけは、当然カーライルとオ
 ーマールの謀めを誘うこととなるが、却って王の興奮はつのるばかり。今度は
 王の絶対性への信仰が彼の口から語られる——

Not all the water in the rough rude sea
Can wash the balm from an anointed king;
The breath of worldly men cannot depose
The deputy elected by the Lord.

(54—)

しかしこうした自信も束の間、ウェールズの兵隊が敵方に走ったという知らせに先ず動揺する。次いでボリングブルックの優勢な兵力、民衆の離反、グリーンらの死、最後にヨークの離反が伝えられるまでの間に、リチャードは絶望から希望へ、勇気から自棄へと激しい動揺を繰り返す。彼をささえるものは“king's name” (85) ——“Arm, arm, my name!” (86) ——であり、またヨークへの希望である。しかし次第に彼は理性を失い——

Say, is my kingdom lost? why, 'twas my care;
And what loss is it to be rid of care?

(95—)

という自嘲となり、グリーンらが降参したと誤解してユグ呼ばわりする。ここで彼の口から思慮もなくとびだして来る‘care’や‘Judases’は、皮肉にも、廃位のシーンでは一そうの重みと哀感を帯びてふたたび語られるのである。

はげしい感情の振巾の中に於て、リチャードの思いは自棄から感傷へ、感傷からほろびの美への陶醉へと徐々に変化する。その間にあって、王冠の空しさ、はかなさへの言及、王もただの人間にすぎないという言明など、リア王が経験する悲劇的認識にも似た感慨が垣間みられるが、もちろんこれらはリチャードにとっては絶望が口走らせたものにすぎない。このシーンに限らず、彼の場合、リア王にみる真の悲劇的認識はついに最後まで見出すことはできないのである。

このシーンはヨークのボリングブルックとの合流を聞いて完全に希望を絶たれたリチャードがフrint城で力つきほろび去ることを願うところで終わっている。先に王を励ますためにヨークの名を口にしたオーマールをふりかえってリチャードはいう——

Beshrew thee, cousin, which didst lead me forth
Of that sweet way I was in to despair!

(204—)

彼にとっては、励ましは絶望への甘美な道から連れだすことにほかならない。何故そこから連れだしたと彼は責めるのであるが、絶望を甘美なものとするには、またそれなりの理由もあるのだ。

Go to Flint Castle: there I'll pine away;
A king, woe's slave, shall kingly woe obey.

(209)

ここには王としての苦悩はない。王の苦悩は本来、王としての自覚と反省から生まれるものである。リチャードにはただ王として滅びていくことへの甘美な陶酔があるだけである。しかも彼にとって、ほろびは王であるが故に救われる、いやそれどころか美化されるのだ。これは悲劇ではなく純粋なナルシズムにはかならない。しかしながら、こうした甘美な陶酔の中に滅びることは、ついにリチャードには許されない。耐えがたい屈辱が彼の前途に横たわっているからである。

フリント城でのリチャードは、始めの中は王としての威厳を備え、そのせりふも王にふさわしい。しかしそれはノーサンバランドに対する時の一種の身構えにすぎない。ボリングブルックの追放解除と相続権を認め、ノーサンバランドを帰らせるや、我が身の弱腰を責めてふたたび激しい絶望におちいる。王の誇りを失ったことを歎いて、いっそのこと王でなければよいと叫ぶのだ――

O! that I were as great
As is my grief, or lesser than my name,
Or that I could forget what I have been,
Or not remember what I must be now.

(III. iii. 136—)

ウェールズの海岸では、王の悲しみに王らしく従うことによって、甘美な陶酔にひたることを願った彼は、いまはむしろ王であることを忘れたいと神に祈る。王の名が幾万の兵士にも勝るともいったその王の名が、いまは却って悲しみの原因となる。ふたたび現われたノーサンバランドに王冠と王杖もそして王宮もすべてくれてやると自棄的に叫び、流す涙で大地をうがち二人の墓穴をつくろうとオーマールに訴えもする。そうした自棄と感傷は以前と同じであるが、しかしリチャードの悲しみに微妙な変化も見られる。すなわち先の王のほろびへの陶酔から、ここでは王であることの意識に苦しむ姿も見られるからである。

5

しかしそんなリチャードもボリングブルックとの対面に際しては意外にも冷静である。ひざまずくボリングブルックの心の中は見通しながら、求めもしない王位を自らくれてやるという。そのせりふには感情の抑制がじゅうぶんに読みとられる。ボリングブルックに対するとき、さすがに彼も感情を抑制する

のであろうか。しかしこの譲位の申し出は一体いかなる心境からであらうか。ヘンリ六世は、スント・オルバンズの敗戦ののちヨークに強いられて、内乱をおわらせるという条件のもとで彼に譲位を約束する。彼には自ら認めているように祖父四世のリチャード二世廃位という道義的弱みもあったのだ。しかしヘンリ六世は、自分の生きているかぎりには王として、ヨークに忠誠を誓わせる。リチャードにはこのような道義的負目はあろうはずもなく、またやがてヘンリ六世が感じた王としての良心的煩悶と田園野人への憧れもあるわけではない。自発的に譲位を申しでる彼の心理は、どのように考えるべきであらうか。ひざまづくボリングブルックに対して、形の上だけのものではあるが、ともかく優越感をリチャードは覚えているのであろうか。それがむなしいものであることは百も承知しながらも、そう思うほかには彼をささえる何ものもない。ほろびの美を求めるリチャードにとってこれは重要なことである。彼にとっての唯一の救いは、王位を譲ってやるのだというむなしい優越感であったはずだ。現実界の圧倒的な優位に抗して彼をささえる唯一の希望は、この種の意識以外にはないからである。それはもちろん錯覚のもつ救いである。

従って廃位のシーンに於て、ボリングブルックの前に連れだされたりチャードに、こうした王の誇りが見られるのも当然である――

Alack! why am I sent for to a king
Before I have shook off the regal thoughts
Wherewith I reign'd?

(IV. i. 162—)

王冠を譲ること自体には、『エドワード二世』のエドワードほどの執着をみせないリチャードが、譲位の形式に強くこだわっているように見うけられるのは、せめて王の誇りをいだいたままで王冠を譲りたいと願うからであらう。そんな願いがリアリストであるボリングブルックに通じるはずはない――

I thought you had been willing to resign.

(190)

Are you contented to resign the crown?

(200)

と素気なく彼は問う。王冠は渡しても悲しみはわたしのもの、わたしは悲しみという臣下をもっている――“but still my griefs are mine.... still am

26. 2 *Henry VI*, I. i. 133-4. 27. I. i. 194-200. 28. II. iv. 1-54.

29. リチャードは王冠の一方に手をかけ、もう一方の側をボリングブルックに掴ませる。

I king of those.” (191—3) ——とリチャードはいう。宿敵の前に引きだされ、思いいもかけぬ形で王冠を渡すという屈辱の中で、なお誇りを保つべく何ものにすがろうとする思いは理解しがたいものではない。しかしながら、王冠への執着をあらわに表明するエドワード二世の迫力をリチャードに求めるべくもない。エドワード³⁰の怒りと悲しみと執着は、力強く素朴にそして男性的な調べて表明されるに対し、リチャードの悲しみは、感情の高ぶりに比例してレトリカルとなっていく。たとえば、‘care’ の二義をもてあそぶ word-play— (195—199) —、そしてまた次にあげる首句反覆のレトリックなどである。

With mine own tears I wash away my balm,
With mine own hands I give away my crown,
With mine own tongue deny my sacred state,
With mine own breath release all duteous rites:

(207—)

これはフリント城でも見られたように³¹、自分の感情に陶酔している場合に於ける現象であり、それはきままって墓穴への思いへとつながっていく。しかしまたその反面、こうしたレトリカルなせりふを通して、かつての発言が、いまあらたな意味を帯びて繰りかえされるという、いわゆるドラマティック・アイロニーとなってリチャードの悲劇の深まりを思わせる。たとえば、ウェールズの海岸で、荒海のすべての水を以ってしても王の体に塗られた聖なる油を洗いながすことはできないと豪語したにもかかわらず、いまは自分の涙で洗いながさうというのである。

30. エドワードは、もし王冠が王子ではなくモーティマーの頭上に冠せられるようなことがあれば、永却に消えない火と王冠が化することを神に念じ、また、何のいわれもなく退位させられる苦しみを、レスターに訴え、しかし天命ならば止むを得ないという。以下引用する。 “But what the heavens appoint, I must obey! / Here, take my crown: the life of Edward too; / Two kings in England cannot reign at once. / But stay awhile, let me be king till night / That I may gaze upon this glittering crown; / So shall my eyes receive their last content, / My head, the latest honour due to it, / And jointly both yield up their wished right. / Continue ever thou celestial sun; / Let never silent night possess this clime: / Stand still you watches of the element; / All times and seasons, rest you at a stay, / That Edward may be still fair England’s King! ... Inhuman creatures! nursed with tiger’s milk! / Why gape you for your sovereign’s overthrow! / My diadem I mean, and guiltless life. / See, monsters, see, I’ll wear my crown again! / What, fear you not the fury of your king? / But, hapless Edward, thou art fondly led; ... And in this torment comfort find I none, / But that I feel the crown upon my head; / And therefore let me wear it yet awhile. (V. i. 56—83).

リチャードにとって、これですべてがおわるとすればまだ救われもしたであろう。しかし最大の屈辱を、すなわち自分の悪政の数々を読み上げることを強いられるのだ。王座を追われることの正当さを、彼自らの口を通して証言するようなものである。これでは王の誇りは完全に粉砕されることになる。ここで彼の怒りはノーサンバランドを始め、なみいるかつての家臣にむけられる。しかしそのせりふには意外にもヒステリックな感情のたかまりは見られず、むしろ深く沈潜する。彼らのあわれみの外観にひそむピラトの正体への怒りから、やがて自らへの怒りへと移っていく。しかしリチャードに於ては、自己への思いは必ず感情の高ぶりを伴わずにはおかぬ。失われた栄光がそうさせるのである。

Nay, if I turn mine eyes upon myself,
I find myself a traitor with the rest;
For I have given here my soul's consent
To undeck the pompous body of a king;
Made glory base and sovereignty a slave,
Proud majesty a subject, state a peasant.

(247—)

おそらくノーサンバランドの“My lord—”という制止がなかったならば、もっと止め度なく続けられ、調べはレトリカルなものとなったであろう。しかしこの“My lord—”にリチャードの思いはふたたび惨めな現実の姿へともどる。

... alack the heavy day!
That I have worn so many winters out,
And know not now what name to call myself.

(257—)

これは素朴で切実な叫びである。王の名を失うことは一切を失うことだ—自分は今誰の‘lord’でもない—。しかしこの痛切な心情は忽ち“O that I were a mockery king of snow,”と自嘲の思へと転じる。これがリチャードにつねに見られる感情の推移である。彼はここで鏡を求める。何のために鏡を乞うたのであろうか。失われゆく自己の姿を鏡の面に求めようとするのであろうか。それはそれで切実な思いである。しかもそれは彼のナルシズムをも満

32. Though some of you with Pilate wash your hands, / Showing an outward pity; yet you Pilates / Have here deliver'd me to my sour cross, / And water cannot wash away your sin. (239-242).

してくれるかも知れない。そこに写る顔——しかも昔と変らぬその顔に、彼の心には昔日の栄光とひれふす群臣たちが一瞬よみがえるが、それは忽ち一転して栄光のはかなさへの思い、そして怒りへと急転する。手鏡を床にたたきつけるリチャードの意中には、昔と変らぬ自分の顔を写しだす鏡に、自分に対するへつらいを感じとり、それがかつての臣下のへつらいへの連想となったのであろう。そして彼らへの怒りが、鏡を投げつける行為となって表現されたのである。もちろんそこにはまた、栄光のはかなさと鏡の脆さとの連想もあったはずである。しかしリチャード自ら“this sport”と呼ぶこの仕種が、ボリングブルックにとっては単に“shadow”にすぎないのも当然である。鏡をたたきつけるということも結局、自嘲の、ゴーストもいった“misery makes sport to mock itself” (II. i. 85) のたぐいにすぎないであろう。リチャードもこれは認めるほかない。

'Tis very true, my grief lies all within;
And these external manners of laments
Are merely shadows to the unseen grief
That swells with silence in the tortur'd soul;
There lies the substance....

(295—)

悲しみの因を与えてくれたばかりでなく、悲しみに耐える術までも教えてくれたボリングブルックに、いささかの皮肉をこめて彼は感謝する。こうして自己の罪状を読み上げる屈辱だけは、どうにか免れて静かにロンドン塔へと連れ去られる。しかし“Whither you will, so I were from your sights.” (315) という一行には、ボリングブルックへの憎しみの外に、いま新たに味わわされた敗北の思いもうかがえるのである。

6

次にリチャードが登場するのは、妻との別れの間 (V. i.) と独白に続く死の間 (V. v.) である。妻と別れるシーンに於けるリチャードには何も特筆すべきことは認められない。二人の対話は純粋に離別の感傷で語られる。ここではレトリカルな表現も別れの哀感を伝えるのに不自然ではないかのようだ。妻と対しているかぎり、何も彼の心をいらだたせるものはないはずだ。ひたすら感傷と悲しみにひたることもできるのである。幽閉地の変更を伝えるノーサンバランドの登場で場面は緊張するが、しかしかつて見せたような感情のたかぶりをリチャードに見ることはできない。むしろノーサンバランドとボリングブルックとの離反を予告するせりふ (55—68) は、かつてない重厚な印象すら

伝える。概してリチャードは妻との別れに於て悲しみを楽しんでいるかのようである。そして次のせりふは、一見あらたな境地への展開を暗示するかのようだ。妻に宗教的な余生を送るようすすめて

Our holy lives must win a new world's crown,
Which our profane hours here have stricken down.
(V. i. 24—)

という。³³しかし我々の期待は、独白と死のシーンに於て完全に裏切られる。

独白は静かな口調で語りだされる。しかしひとりで静かに悲しみを味わいつづけていると想像されたリチャードは、意外にも千々に乱れる心の動揺を抑えかねているのである。我々はそのねばっこい人間臭さにむしろ驚かされる。過去を思い、現実を思い、脱出を思いそして忍従を自らに説く。しかし彼の思いは安らかではありえない——

... but whate'er I be,
Nor I nor any man that but man is,
With nothing shall be pleas'd, till he be eas'd
With being nothing.

(V. v. 38—)

これはまたレトリカルな表現ではあるが、つまり人間死ぬまで心安まることはないというのである。これは勿論その直後に来る死を予測するものだが、それにもまして、死の寸前まで、いや死の瞬間に於てすらリチャードの心が平静ではありえないことを暗示するものであろう。おそらく彼を慰めるために奏でられる音楽であろうか、その楽にききいりながら、調子外れの楽の音に、その狂いを聞きわける耳を持ちながら、ついに時代の狂いを聞きわける耳を持たなかったことへの悔恨、その結果、こうして死を待ちながら、一刻一刻時の流れに、身を細らせている現実を思うのである。

33. この二行は、III. iv. での庭師がリチャードの失政について語ったせりふを連想させる。"Had he done so, himself had borne the crown, / Which waste of idle hours hath quite thrown down." (65-66) 庭師が 'waste of idle hours' といっているところを、リチャードが 'profane hours' といっているのはおもしろい。彼は III. iii. の絶望のシーンに於ても、'a set of beads', 'hermitage', 'palmer's walking staff', 'a pair of carved saints' と盛んに宗教的なイメージを用いる。しかしそれは彼の宗教的意識を物語るものでないことはいうまでもない。

34. リチャードにとっては真の政治的反省はなされない。彼はただ失政の結果としての現在の悲惨を歎くだけで、政治失敗そのものへの反省はない。政治意識、それは当然王としての倫理的意識であるが、そういったものは彼にはない。

... so sighs and tears and groans
 Show minutes, times, and hours; but my time
 Runs posting on in Bolingbroke's proud joy,
 While I stand fooling here, his Jack o' the clock.

(57—)

「お前の顔の见えないところなら何処へなりと」といったその当の相手のボリングブルックが、こうしてひとりいるリチャードの瞑想の中にもはいり込んで来るのである。

思いもかけぬ馬丁の登場は、リチャードの死の場面にヒューマンな香りを与えるものではあろう。しかしこれもまた好意の音楽と同様リチャードの心を動揺させるだけである。愛馬が誇らし気にボリングブルックを乗せたという馬丁の話に、彼は怒りを、しかも嫉妬に近い怒りを馬に覚える。しかも馬への怒りを愚かであったと反省したのも束の間、忽ち馬の連想は耐えがたい屈辱へとつながっていく——

I was not made a horse;
 And yet I bear a burden like an ass,
 Spur-gall'd and tir'd by jauncing Bolingbroke.

(92—)

そこへ獄吏が食事をもって登場する。しかしいつもの毒味をことわる——王のもとから来たエックストンの命令だという。またしてもボリングブルックだ。リチャードは完全に心の平静を失う。“Patience is stale, and I am weary of it.” (103) と叫びながら獄吏にうってかかる。刺客たちの乱入はいよいよリチャードの気持を動転させたかのようだ。

How now! what means death in this rude assault?

(105)

毒殺を予期していたリチャードの、思わぬ刺客の乱入から受けた驚きをこの一行はしめしている。こうして彼は若干の抵抗ののち殺される。

Mount, mount, my soul! thy seat is up on high,
 Whilst my gross flesh sinks downward, here to die.

(111—)

死にいたるまでついにボリングブルックへの憎しみにさいなまれながら、そしてただならぬ心の動揺の中に死に臨みながら、リチャードの最後のせりふは、ともかく王としての誇りを示してはいる。それはあるいは王の栄光にひたりな

がらの死であったかも知れない。しかしながら、最後の抵抗も多分にデスペレートなものであったことも認めねばならない。そのせりふに見られる高揚も妙に空しく響くのである。『ヘンリ六世・第三部』に於けるヘンリの死、また『エドワード二世』に於けるエドワードの死と較べてみても、リチャードの最後には何か絶望的なあがきにも似た思いを禁じ得ない。刺客への抵抗、そしてその一人を武器を奪って殺すといった行為にも、真の勇氣とは異なる動物的な何ものかを感じるのである。³⁵ 死の直前の激しい心の動揺の反動としてしかリチャードのそうした行為を考えることはできないからである。しかしまた反面、リチャードとは違って、殺されながらも最後に“O, God forgive my sins, and pardon thee!” (3H 6 V. vi. 60) と殺人者(後のリチャード三世)の許しを神に求めたヘンリには覚えることのできない人間的なものをリチャードの死に感じるのも事実である。また、刺客ライトボーンに対して、始めは刺客とは明確に知らないながら言いしれぬ恐怖を覚え、しかもだまされて眠りにいり、やがて目覚めて殺意を知るや、“O spare me, or despatch me in a trice.” (110) と叫び、後はただ、押しつぶされてしまうエドワードの、ただあわれというほかにはことばもない死と較べると、リチャードの死とその直前の動揺に、きわめて人間くさいものを感じるのである。それだけに哀感という点では、リチャードの死はエドワードには遠く及ばない。刺客に対して、命乞いをするのも人間的なあわれさを催させ、また激怒して立ち向かうのもこれまた人間的な行為であろう。しかしリチャードの行動が人間的とはいえ、多分にいや全く衝動的な行為であったことも否定できない。そこに先に述べた動物的な何ものかを感じられるゆえんである。

それにしても、かつてのリチャードに見られなかったこうした一面を、彼の死の瞬間に与えたシェイクスピアの意図は一体どこにあるのであろうか。王として、政治の失敗に対する反省は全くみせず、ただ感性の世界に生き続けてきたリチャードにとって、こうした衝動的な死もまた必然の結果だというのであろうか。

(1967.10.30)

35. Villain, thy own hand yields thy death's instrument. / Go thou and fill another room in hell. (106-7).